様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２４７５

研究課題名（和文）第3言語としてのスペイン語学習意欲における英語学習経験の影響の解明と指導法の提案

研究課題名（英文）Exploring the Impact of English Language Learning Experiences on the Motivation to Learn Spanish as a Third Language: A Proposed Teaching Approach

研究代表者
横山　友里（Yokoyama, Yuri）

中京大学・グローバル教育センター・外国語嘱託講師

研究者番号：８０７７８９４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：英語の国際的地位、内発的動機づけや社会政治的要因はスペイン語の動機付けを低下させるがスペイン語の統合的動機付けを育む経験が社会政治的要因などを超えて内発的動機づけとIdeal L2 Selfを生み出す可能性が示唆された。よってスペイン語教育ではコミュニケーションの成功体験が鍵となり、その機会を生み出す指導法が重要になるが、学習者はスペイン語を話すことに対して恥ずかしさやアイデンティティの問題からくる抵抗感を持つことが多い。これらの軽減のためには、ストラテジー教育やその他の事前教育が有効である。それらを通じて学習者は相互交流を円滑に進める能力を身につけ、スペイン語習得も促進されると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
スペイン語学習時と英語学習時における学習者の情意面の違いが明らかになり、これらの特性を理解することで、より効果的な教授法の開発や、授業展開、また学習が可能となることを示した。また、本研究ではこの点を踏まえて、日本におけるスペイン語の具体的な指導法の提示とその注意点を明らかにした。これにより、学習者のモチベーションを高め、継続的な学習を促進することで、スペイン語能力の向上を実現することが期待できる。本研究の成果は、学術的には外国語教育の理論に新たな視点を提供し、社会的には日本でのスペイン語教育の質の向上に寄与するものといえる。

研究成果の概要（英文）：The global dominance of English, coupled with intrinsic motivation and sociopolitical dynamics, may reduce the motivation to learn Spanish. However, experiences fostering integrative motivation for learning Spanish can generate intrinsic motivation and cultivate an Ideal L2 Self, overcoming sociopolitical barriers. Successful communicative experiences are therefore crucial in the context of Spanish language instruction, especially the implementation of pedagogical methods that encourage such experiences. Notably, learners often demonstrate reluctance in engaging in Spanish conversations due to feelings of embarrassment and identity-related concerns. By employing strategic teaching methods and incorporating pre-instructional activities, learners can hone skills that facilitate interactive communication, catalyzing their acquisition of Spanish.

研究分野：外国語教育

キーワード：スペイン語　学習意欲　タスクを基盤とした指導法　第３言語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

外国語教育における多言語・複言語の重要性は昨今の世界情勢の影響により認められてきているといえるだろう。また、日本においても、今後の社会情勢を考えると、英語のみならず複数言語使用のメリットは大きいだろう。しかし、特に日本人は外国語の習得に困難を感じるとされる場合がある。複数の言語を学習することは、より多くのプラス・マイナス両面の認知負荷がかかるため、１つの言語を学習するよりも効果的な学習・教育方法が必要となる。よって、日本での第 3 言語学習意欲プロセスの解明と効果的な学習方法の探究が求められる。

そのような中、外国語教育における多言語・複言語の研究が行われている状況ではあるが、課題も存在する。具体的には、研究の多くは多言語使用が日常的な学習者を対象としており、日本のように外国語が日常的に使われない文脈における多言語・複言語の研究が十分に行われていないこと、文法面を対象に研究が行われ、学習者の情意面についての研究が遅れていることである。よって、これらの解決に向けて、日本における多言語・複言語の学習者の情意面を明らかにし、それを踏まえて効果的な指導法を提案する必要があった。

２．研究の目的

上述の背景を基に、本研究の目的は次の事項の解明であった。

1) 日本の多言語・複言語教育における、これまで十分に研究されていなかった学習者の情意面を、スペイン語学習者を対象として明らかにする。
2) 学習意欲は常に変動するという前提のもと、その複雑さと英語学習経験を持つスペイン語学習者の特徴を解明する。
3) 学習意欲の低下を防ぐ手段を確立する。これは学習意欲低下の要因とそのプロセスを明らかにし、それらに基づいた防止策を提案することを含む。本研究では、明らかになった学習意欲変動要因から効果的な指導法を仮説として提示し、教育的介入を試みてその効果を実証する。これは、より良い外国語教育を行うための一助となることが期待される。
4) 外国語教育実践に対する貢献への具体的な策を考案する。

本研究は、これまであまり注目されてこなかった複数言語学習者の情意面や学習意欲を考察し、その結果からより効果的な教育方法を探求することを目的とした。多言語・複言語教育を通じて異文化間コミュニケーション能力を習得することは、今後の時代を生き抜く上で必要不可欠である。しかし、同時に、目まぐるしく変化する社会の中で、これらの能力を効率よく身につけることも重要である。国際化が進行する中で、大学生は将来的に国境の壁がほとんど存在しない世界で生活することになるであろう。そのため、多言語・複言語教育を通じて異文化間コミュニケーション能力を育成することは、生きる力と人間性の発展につながると言える。本研究の目的は、日本におけるこのような外国語教育の質の向上に貢献することであった。

３．研究の方法

研究の目的を達成するため、研究期間中に、以下のように研究を行った。

1) まず、学習者の情意面の特徴を明らかにするため、スペイン語学習者を対象に、英語学習とスペイン語学習に対する質問紙調査を行なった。質問紙調査は、日本の大学におけるスペイン語学習者の英語学習の影響を考察するために、Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009)で使用されている外国語学習に関する質問紙を使用した。これらの結果を、英語学習のものとスペイン語学習のものとを比較検討し、共通点、相違点、また英語学習のスペイン語学習への影響を考察した。
2) 質問紙の結果により学習者の傾向をつかんだのち、特徴的な傾向を示した学習者を対象としてインタビュー調査を行い、より詳細に日本におけるスペイン語学習者の英語学習の影響を考察した。
3) 学習意欲低下の要因とそのプロセスをインタビュー調査から明らかにし、防止策として効果的な指導法を提示した。そして実際の授業でその指導法を実施した。その効果を考察するため、その指導法を受けた学習者を対象にインタビュー調査を行い、どのような情意面の変化があったか、どのような点が困難だったかなどの点を明らかにした。
4) 具体的な指導法を精査し、指導法に対する知見を深めるとともに教材作成に取り組んだ。

４．研究成果

スペイン語学習と英語学習の差異については、以下の点が明らかになった。スペイン語の学習意欲は、様々な様相をみせるが、概してスペイン語学習者は、英語学習の方に重点を置いていること、道具的動機付けのうち、促進、つまり何かポジティブな目標に向かって学習をするスタイ

ルであるか、また、予防、つまり何かを嫌なことを予防するため、または義務的に学習するスタイルであるかどうかに差がみられること、教育的介入がなにも行われない場合、英語の学習意欲の状態がスペイン語でも続く傾向にあり、それを打破するにはスペイン語を使える、またはスペイン語が分かるという理解の経験が重要であるという点である。

また、英語学習と比較した場合、大学生にとってスペイン語は新しく学習を始めた言語であるため、スペイン語学習初期では学習者は自分が理想とする L2 自己、Ideal L2 Self に従って積極的に取り組むが、段々と道具的動機付けの予防の枠内での単位のためだけの学習に変化してしまう。その枠内から出るためには、学習内容が将来どのように有効かという示唆や文化に触れる経験などが有効であり、culture interest（文化への興味）の視点が重要になる。またスペイン語は英語よりも将来性で劣っていると学習者は考えているが、それが必ずしも学習時間の低下には繋がらない。スペイン語は皆が初心者であるため、少しの努力で高得点を取ることができるなどの理由からスペイン語の試験勉強に注力して良い成績をとり将来へ活かすという姿勢、つまり、ねじれた道具的動機付けにおける促進の存在も示唆された。このように、スペイン語学習と英語学習の違いは Instrumentality-promotion（道具的動機付け促進）、Instrumentality-prevention（道具的動機付け予防）、Ideal L2 Self（理想 L2 自己）、Culture Interest（文化への興味）に見られることが明らかになった。

これらの点を踏まえ、より詳細に分析を行うことを目的としてインタビュー調査を行った。スペイン語学習と英語学習で異なる結果を示した学習者を対象にして、上記のスペイン語学習と英語学習で違いの見られる項目について半構造化インタビュー調査を行った。その結果、Instrumentality-promotion、Instrumentality-prevention、Ideal L2 Self、Culture Interest の値がスペイン語の方が高い学習者は、スペイン語学習を始めるきっかけや、学習過程において強い動機となる個人的経験を有していること、またスペイン語話者、もしくはスペイン語を学習する仲間との交流の経験を持っていることが示唆された。全体で見るとこれらの値はスペイン語より英語の方が高いが、その中でも英語よりスペイン語において高い値を示す学習者は、前述の個人的体験や交流の機会がその要因として働いている可能性がある。国際的に使用できる言語という英語の Instrumentality-promotion の要因を補う形で、スペイン語においてこれらの個人的体験が大きな影響を及ぼしていると言える。

また、インタビューデータを、英語学習と、英語以外の言語学習における動機付けを考察した Sugita McEown, Sawaki, and Harada (2017)の結果と対比させ、類似点、相違点を明らかにした。その結果、英語の重要性を示す社会政治的な要因がスペイン語学習者の自己とアイデンティティに影響を与えること、国際志向性を持つ学生は様々な言語への興味があるが、英語の優位性は存在していること、英語における内発的動機づけや社会政治的な要因はスペイン語などの第 3 言語における統合的動機付けの志向性を低下させること、強い統合的動機付けの志向を育む経験は、こうした社会的・政治的要因を超えて、L3 における内発的動機づけと Ideal L2 Self を生み出すことができること、一方、内発的動機づけや Ideal L2 Self を変化させるためには、必ずしもこのような強い統合的動機付けの経験が不可欠なのではなく、その他にも、ロールモデルや学習における満足感なども、同じような変化をもたらすことが可能であることが明らかになった。

このような特徴が明らかになり、学習者の学習意欲を高める教育方法としてスペイン語を使う体験を授業内で行うことが重要であることから、タスクを基盤とした指導法(TBLT:Task-Based Language Teaching)に焦点を当て、研究を行った。具体的には、タスクを基盤とした指導法の有効性を考察し、情意面を明らかにした。また、タスクを基盤とした指導法の教材と概説の作成を共同で行なった。タスクの理論的な解説、授業へタスクを導入するための適切なタスクの選択、評価方法や難易度の捉え方などを含む内容であった。このタスクを基盤とした指導法をもとに行ったスペイン語の授業の参加者を対象に、授業参加前後の情意的側面の変化を考察することを目的としてアンケート調査とインタビュー調査を行った。その結果、学習者はスペイン語を話すことに恥ずかしさ、アイデンティティの問題などから生じる抵抗を感じており、これらを軽減するストラテジー教育などの事前教育が相互交流を生じさせやすくする可能性が示唆された。

このように研究結果を踏まえて、具体的に効果の期待される指導法とそれに伴う問題点を導き出せたことで、研究成果による社会還元を一定の範囲内で実現することができたと考えている。本研究により、より効果的に外国語教育を行うための具体的な指針が明らかになったため、今後はこれらをより詳細に考察していきたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 横山友里	４．巻 66
２．論文標題 Maria del Carmen Mendez Santos. Introduccion a la linguistica aplicada para la ensenanza del espanol: 101 preguntas para ser profe de ELE. 2021, 247p.	５．発行年 2022年
３．雑誌名 HISPANICA	６．最初と最後の頁 163-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4994/hispanica.2022.163	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuri YOKOYAMA	４．巻 -
２．論文標題 La mutua influencia emocional entre el aprendizaje del ingles (L2) y el espanol (L3): el caso de una universidad japonesa	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Internacionalizacion y ensenanza del espanol como L2/LE: plurilinguismo y comunicacion intercultural	６．最初と最後の頁 387-400
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuri YOKOYAMA	４．巻 -
２．論文標題 Influencia de las experiencias de aprendizaje del ingles en la motivacion de los alumnos de espanol dentro del contexto universitario japones	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Perfiles, factores y contextos en la ensenanza y aprendizaje de ELE/EL2.	６．最初と最後の頁 1151-1160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 横山友里
２．発表標題 タスクを基盤とした外国語指導法における学習者の情意面に関する質的研究
３．学会等名 第450回関西スペイン語学研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yuri Yokoyama
２．発表標題 Evidencias sobre la motivacion del ingles (L2) y del espanol (L3) en universidades japonesas a traves de entrevistas
３．学会等名 31.° Congreso Internacional de ASELE（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 加藤　由崇、松村　昌紀、Paul Wicking、横山　友里、田村　祐、小林　真実
２．発表標題 コミュニケーション・タスクのアイデアとマテリアル 教室と世界をつなぐ英語授業のために
３．学会等名 言語教育エキスポ
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yuri Yokoyama
２．発表標題 La mutua influencia emocional entre el aprendizaje del ingles (L2) y el espanol (L3) en las universidades japonesas
３．学会等名 30o CONGRESO INTERNACIONAL DE ASELE 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kato Yoshitaka, Kobayashi Manami, Matsumura Masanori, Tamura Yu, Wicking Paul, Yokoyama Yuri
２．発表標題 Materials Development for TBLT in an EFL setting: Challenges and Possibilities.
３．学会等名 Eighth International Conference on Task-Based Language Teaching（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yuri YOKOYAMA
２．発表標題 Influencia de las experiencias de aprendizaje de ingles en la motivacion de alumnos de espanol en el contexto de una universidad japonesa
３．学会等名 XXIX Congreso Internacional de ASELE（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 横山友里
２．発表標題 『教授法（おしえかた）～新しい挑戦～』 「TBLT (Task-Based Language Teaching)を取り入れた日本におけるスペイン語教育」
３．学会等名 第117 回関西スペイン語教授法ワークショップ
４．発表年 2018年

１．発表者名 横山友里
２．発表標題 タスクを重視した指導法を取り入れた日本におけるスペイン語教育（II） ―タスクを自分たちの授業に合わせてみようー El enfoque por tareas aplicado a la ensenanza del espanol en Japon (II): Reflexiones sobre su posible implementacion en clase
３．学会等名 第10 回 関西スペイン語教師の集い（第124 回関西スペイン語教授法ワークショップ）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 Paul Wicking 編著/ 田村 祐 編著/ 横山友里 著/ 松村昌紀 著/ 小林真実 著/ 加藤由崇 著	４．発行年 2023年
２．出版社 三修社	５．総ページ数 112
３．書名 Getting Things Done [Book 2] Tasks for Connecting the Classroom with the Real World タスクで教室から世界へ［ブック2］	

１．著者名 Paul Wicking 編著/ 田村 祐 編著/ 加藤由崇 著/ 小林真実 著/ 松村昌紀 著/ 横山友里 著	４．発行年 2022年
２．出版社 三修社	５．総ページ数 96
３．書名 Getting Things Done [Book 1] Tasks for Connecting the Classroom with the Real World タスクで教室から世界へ［ブック１］	

１．著者名 加藤　由崇、松村　昌紀、Paul Wicking、横山　友里、田村　祐、小林　真実	４．発行年 2020年
２．出版社 三修社	５．総ページ数 264
３．書名 コミュニケーション・タスクのアイデアとマテリアル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関